

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第42集

川合遺跡18区

平成3年度静岡バイパス(川合地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第42集

川合遺跡18区

平成3年度静岡バイパス(川合地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

川合遺跡18区は静岡バイパス建設工事に伴う事前調査として、平成3年度に発掘調査を実施したものである。

当研究所では設立以来、静岡バイパス着工に伴い埋蔵文化財の発掘調査を行っているが、それぞれの遺跡で多くの成果を上げている。川合遺跡は昭和59年から62年にかけて調査が行われ、弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集落及び古墳時代後期の水田等が発見されており、それに伴う遺物も大量に出土している。静岡平野における拠点集落の1つとして興味のもたれる遺跡である。

今回調査した18区は8区と10区の間に位置し、川合遺跡の中心部にあたる。工事により調査対象となる土層の大半は失われていたが、溝状遺構、土坑状遺構、柱穴等の遺構、弥生時代から古墳時代にかけての土器、土製品、石器といった遺物を発見することができ、川合遺跡の中心部としての一端をうかがうことのできる資料となるであろう。

調査ならび本書作成にあたっては、建設省を始めとする関係各位に深謝するとともに、調査および資料整理にあたった当研究所職員と作業に参加された多くの方々の労を多とするものである。

平成4年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所 長 斎 藤 忠

例 言

1. 本書は、静岡市川合大坪1059-1に所在する川合遺跡18区の発掘調査報告である。
2. 調査は、平成3年度静岡バイパス埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部地方建設局の委託を受け、調査指導機関・静岡県教育委員会、調査実施機関・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 現地発掘調査は、平成3年4月15日から平成3年5月31日まで、静岡県埋蔵文化財調査研究所長斎藤忠、調査研究部長山下晃、調査研究2課長栗野克巳の指導の下に、調査研究2課一杉高德、岩崎直巳、中鉢賢治が担当して実施した。
4. 整理作業の実務は、下野整理事務所で実施した。石器の石材等については、静岡大学教養部教授伊藤通玄先生にご教示頂いた。また、遺物の整理に関しては、当研究所山田成洋主任調査研究員、伊藤律子・小野千賀子嘱託技術員の協力を得た。記して、謝意を表したい。
5. 本書の遺物写真は、池田洋仁氏に撮影を依頼した。
6. 本書の執筆は、静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して実施した。執筆担当は、以下の通りである。
 - ・第1章、第3章、第4章（第1節、第2節、第3節3） 一杉高德
 - ・第2章 岩崎直巳
 - ・第4章（第3節1・2） 中鉢賢治
 - ・第5章 栗野克巳
7. 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

目 次

| | |
|--------------|----|
| ・序 | |
| ・例言 | |
| 第1章 調査の経緯 | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 2 |
| 第3章 調査の概要 | 4 |
| 第1節 調査の方法 | 4 |
| 第2節 調査の経過 | 5 |
| 第4章 調査の結果 | 7 |
| 第1節 基本層序 | 7 |
| 第2節 遺構 | 8 |
| 第3節 遺物 | 13 |
| 1. 土器 | 13 |
| 2. 土錘 | 15 |
| 3. 石器 | 22 |
| 第5章 まとめ | 25 |
| 自然科学的分析 | 27 |

第1章 調査の経緯

静岡市川合地区は、一般国道1号静岡バイパスの路線内にあり、昭和58年度、静岡市教育委員会によって予備調査が実施された。その結果、宮下・川合・内荒の3遺跡が確認されたため、当研究所が、昭和59年度から昭和61年度まで発掘調査を行った。そのうち川合遺跡は、昭和60年4月1日から昭和61年3月31日まで発掘調査が実施されている。

その際検出された主な遺構としては、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけては、掘立柱建物跡43棟・方形周溝墓3基・溝・旧河道・土坑など、古墳時代中期のものとしては平地住居跡2棟・竪穴住居跡1棟・低墳丘墓1基・溝・旧河道・祭祠遺構・水田遺構・井堰など、および古墳時代後期の水田遺構、江戸時代前期・末期それぞれの水田遺構等がある。また、それらに伴う遺物も、土器、石製品、木製品、金属製品等多種多様に出土し、大変貴重な成果を得ている。

今回調査の行われた18区は、最初の設計段階では既設の道路部であり、橋台コンクリート築造は予定されていなかったため、調査は行われていなかった。しかし、建設省の設計変更により、平成2年度末に、迂回道路がつくられ、コンクリート製基礎杭打ち、鋼矢板土止め支保工まで工事が進行し、包含層が深く掘削されていることが判明した。そこで、建設省中部地方建設局静岡国道工事事務所と平成3年末話し合いを持ち、5月31日までに現地調査を終了することで緊急調査に入った。

18区は、昭和59年7月からの調査で設定された川合地区全体の16の調査区のうち8区と10区の間で、川合遺跡のほぼ中心に位置している。前述のとおり、川合遺跡では、遺構・遺物にしても大きな成果があげられ、特に、18区の隣接する8区・10区では低墳丘墓・石器製作砦等貴重な発見もある。そのため、18区も本来ならかなりの遺構・遺物の発見が予想された所であるが、残念ながら、今回は殆ど包含層が削り取られてしまった後の調査であったため、そう多くの資料を得ることができなかった。

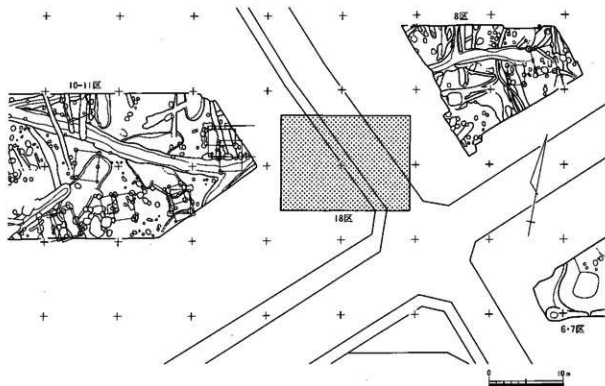


図1 18区位置図

第2章 位置と環境

今回発掘調査をおこなった川合遺跡18区は、川合遺跡群のひとつ川合遺跡のほぼ中央部、8区と10区の間位置するごく小規模な区画である。したがって、位置および環境についての詳細は川合遺跡群の調査報告書『宮下遺跡』『内荒遺跡』『川合遺跡』などに詳しいのでそれにゆずるとして、ここではその概略を述べるにとどめておく。

位置と地形 川合遺跡は、静岡平野北東部の麻機低地東端部に位置する。静岡平野は安倍川の洪水・氾濫により運ばれた砂礫の堆積によって形成された扇状地であり、その周辺部には麻機低地など泥層よりなる低湿な平地が存在するとともに、やはり安倍川の洪水流により形成された何本かの自然堤防が存在している。麻機低地は安倍川北方に広がる低湿地で、海面上昇が大きかった縄文時代前期には海水が侵入して古折戸湾の一部となっていたと考えられているが、その後、安倍川・巴川などにより運搬された砂礫・砂土・泥が堆積してしだいに陸地化し、現在見られるような海拔10mほどの低湿な沖積地となった。

麻機低地の南東部は、赤石山地の南縁である安倍山地南端の竜瓜山から派生した南沼上丘陵と、竜瓜山東斜面に源を発する長尾川により形成された扇状地により閉塞されている。長尾川は河床勾配約1/300という急勾配な河川で、洪水のたびに大量の土砂が押し出され、河床が高いところでは周辺よりも約2mも上昇し、天井川となっている。また、麻機北部の山地に源を発する巴川が、この閉塞部を南に迂回しながら横切ったちで、麻機低地から東の折戸湾に向かって流れている。巴川は河床勾配が緩く排水機能が悪い河川で、この川が麻機低地の閉塞部を横切る地域である「川合」は、古来よりひんぱんに洪水に悩まされてきた。川合新田の如きも、排水が悪く、常に水に浸されたような状態であったところを、近世になってようやく水田化したものである。遺跡は、この地域のあまり浸水しない場所、つまり、南沼上丘陵に連なる高台と巴川・長尾川が形成した自然堤防および微高地上の海拔10m前後のところに立地している。近年は巴川改修を含む土地改良事業が実施され、果實南沼上団地が建設されたのをはじめ宅地化が進み、人口の増加に伴って昭和48年には県立静岡東高等学校、54年には市立西奈南小学校が新設されるなど、県道清水千代田静岡線（通称、北街道）沿線を中心に市街化が進行している。

歴史的環境 静岡市・清水市に広がる静岡平野で、現在知られている主な遺跡を図2に挙げた。旧石器時代にまでさかのぼる遺跡はなく、この地域における歴史は縄文時代に始まる。縄文時代の遺跡としては、麻機丘陵東麓のほぼ中央に位置する時ヶ谷・有永前田、南沼上丘陵西麓に位置する佐数堂・長崎鼻の4遺跡が知られているが、いずれも麻機の低湿地を臨む丘陵周縁部に立地している。

弥生時代の遺跡は、中期初頭までは数的に限られているが、中期中葉になると水田を伴う集落遺跡が丘陵に続く低地の微高地上や谷から押し出された扇状地上に進出し、後期に入ると遺跡数は激増して水稲耕作のひとつの面取りとなっている。ところが終末～古墳時代前期になると、理由はよくわからないが低地に立地する遺跡は減少し、再び丘陵上へ集落を立地するようになる。静岡市の有東・有東橋子・川合・瀬名、清水市の長崎・能島・飯田などの遺跡では、弥生時代中期～古墳時代にかけての水田跡や墓池が調査されて人々の生活のあり方が明らかにされつつあり、特に、多数の木製農具が水田跡から出土しており、水田経営の前提となる知識的・技術的要素が追究されている。

古墳時代になると、農業生産力の拡大や農業生産のための共同作業の必要性から地域を統率する首長が出現し、その墓である古墳が築造されるようになるが、静岡平野においては、上記の弥生時代からの遺跡が引き続き営まれるほか、縄文、弥生時代の遺跡を取り巻く楔形切込谷上に数多くの横穴式古墳群が築造され、それを集約するように円墳が造られるようになっていく。



図2 周辺主要遺跡地図

| No. | 遺跡名 | 時代 | 類別 |
|-----|----------|---------|--------|
| 1 | 行基聖母遺跡 | 鎌文後期 | 敷布地、墓塚 |
| 2 | マルブツコウ志塚 | 古墳 | 古墳 |
| 3 | 納少谷遺跡 | 鎌文早期、野生 | 敷布地 |
| 4 | 渡少谷遺跡 | 鎌文中期～近世 | 水田 |
| 5 | 三浦・砂古遺跡 | 古墳前期 | 古墳 |
| 6 | 伏見東遺跡 | 鎌文～古代 | 墓塚 |
| 7 | 長崎東遺跡 | 鎌文中期 | 墓塚 |
| 8 | 西原上古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 9 | 川口倉庫群 | 鎌文～近世 | 墓塚、墓池 |
| 10 | 藤名古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 11 | 鎌倉遺跡 | 鎌文～中世 | 水田 |

| No. | 遺跡名 | 時代 | 類別 |
|-----|----------|------------|-------|
| 12 | 藤名山遺跡 | 鎌文後期 | 墓塚 |
| 13 | 磯崎山古墳群 | 古墳後期 | 古墳 |
| 14 | 藤村樋古遺跡 | 鎌文中期～古代 | 墓塚 |
| 15 | 藤原山古墳群 | 古墳前期～後期 | 古墳 |
| 16 | 藤原山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 17 | 小島遺跡 | 弥生前期～古墳前期 | 墓塚、水田 |
| 18 | 芥菜遺跡 | 弥生中期～後期、中世 | 墓塚、墓池 |
| 19 | 豊島遺跡 | 鎌文後期、古墳 | 墓塚、水田 |
| 20 | 元宮ノ母明家遺跡 | 鎌文～中世 | 墓塚、墓池 |
| 21 | 堀ノ内入遺跡 | 鎌文中期 | 敷布地 |
| 22 | 片山渡寺跡 | 古代 | 寺院 |

| No. | 遺跡名 | 時代 | 類別 |
|-----|------------|----------|--------|
| 23 | 伊止谷塚穴跡 | 古墳後期 | 墓塚 |
| 24 | 石川遺跡 | 弥生、古墳 | 墓塚 |
| 25 | 飯沼遺跡 | 弥生、古墳、中世 | 敷布地 |
| 26 | 延海遺跡 | 弥生、古墳 | 敷布地、墓池 |
| 27 | 根元遺跡 | 古墳 | 敷布地 |
| 28 | 根元遺跡 | 弥生、古墳 | 敷布地 |
| 29 | 長崎遺跡 | 弥生 | 敷布地 |
| 30 | 上原遺跡 | 鎌文～古墳 | 墓塚 |
| 31 | 西谷家(真瀬町)古墳 | 古墳 | 古墳 |

訂正: 『野間集文化財図録1』、『野間集文化財地名帳1』、『野間集文化財図録1-2』より訂正

表1 周辺主要遺跡表

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

18区の現地調査は、平成3年4月15日から平成3年5月31日まで、約1カ月半にわたって行われた。18区は、川合地区全体を16分割した区画の、8区と10区の間に位置する。今回の調査の際のグリッドは、昭和59年からの調査の際のものをそのまま踏襲し、10m×10mのものを設定した。調査面積約219㎡の18区は、C44・C45・D44・D45グリッドにあたる。

第1章で述べたように、調査区内は既に鋼矢板が打たれ、鋼矢板が倒れてこないようにH鋼を使った切り張りや縦横に4本設置され、表土から4～5mの深さまでも重機により掘削されていた。また、橋台築造のため、直径1m70cmのコンクリート製基礎杭が12本も打ち込まれており、バルコン設置なども困難を極めた。さらに、湧水と鋼矢板の継ぎ目からしみ出る水のため、工事掘削の際攪乱された土がヘドロ状になり、調査区内は足を踏み入れるのにも苦勞する状態であった。そこで、排水対策として、北東隅に集水枡を設置し、水中ポンプによる24時間強制排水を実施した。また、水の流路を確保すると同時に土層の確認をするため、トレンチを南北に2本、東西に2本入れた。が、それでも思うように排水できなため、調査区西側が相当深く掘削されている事を確認した後、バックホーによるヘドロ除去を行い、そこにもう1ヶ所集水枡を設置した。また、調査区が大きな深い穴のような状態であるため、調査区付近に子供などが入り込まないように、フェンスバリケードを設け安全確保につとめた。

調査は、川合8～12区でX層と呼んだ

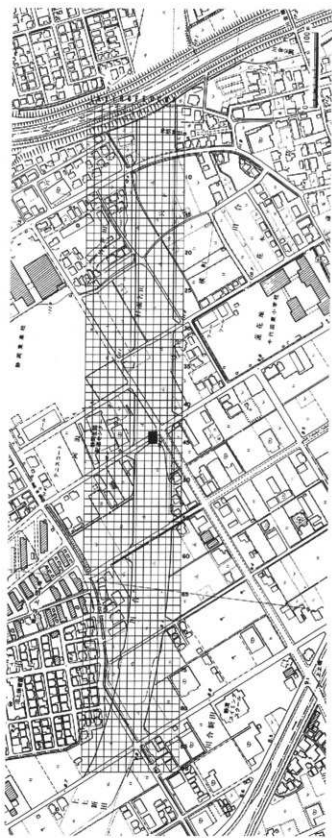


図3 グリッド配置図

弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての包含層である黒色粘土層がどのように残存しているかの確認からはいり、X層が既に削り取られている部分については、ヘドロ状になっている2次堆積土の除去面で精査し遺構確認を行った。また、調査区内の僅かではあったがX層の残存している部分については、グリッド及び地点ごとにX層を三分割し掘り下げた後、XI層上面で遺構確認を行った。出土遺物は、グリッドごと、層位別・遺構別に取り上げ、土器・木製品・石製品・自然遺物等に分けて登録を行った。

現地実測図は、1:20縮尺で遺構平面図・土層断面図・調査区全体図を作成し、遺物出土状況図など一部1:10縮尺のものも作成した。写真は、6×7判モノクロ・35mmモノクロ・35mmカラーライドの組み合わせで記録し、35mmカラーネガを調査工程記録用として使用した。また、全景写真については、高さ15m・26mの高所作業車を使用し全景撮影を行った。

尚、調査のもう一つの大きな目的であった工事掘削の際に排出された土からの遺物探しは、当初、調査区のすぐ横に置かれていたものを調査区内の排土処理の関係からダンプで移動し、小鍬・両刃削り等を使い行った。

第2節 調査の経過

川台遺跡18区の調査は、前述の通り、緊急調査であったため事前準備が非常に短いまま現地調査に入ることになった。調査担当者3名が4月1日付けで当研究所に配属された者だったため、作業員の募集等の各種準備に関しては、宮村典男主任調査研究員・縄巻強調査研究員等に全面的に協力を得た。そして、プレハブ・トイレの設置等を4月12日から開始し、4月15日からの現地調査に備えた。以下、一週間の作業工程を記す。

・4月15日～4月19日

池ヶ谷遺跡発掘調査事務所から発掘器材の搬入を行い、フェンスバリケードの設置など安全対策を施した。また、調査区内は、工事により掘削された土がヘドロ状になっており、鋼矢板から水の湧き出しもあるため、排水対策も兼ねて、中央に南北方向のトレンチ掘削を開始した。

・4月23日～4月26日

調査区内の状態は予想以上に悪く、ヘドロ状の土の除去がなかなか思うように進まないため、バックホーを使い調査区西側の特に攪乱のひどい部分の土を除去した。また、土層確認のためにも、南北両壁よりと東壁よりにトレンチを設定し掘削を開始した。

尚、調査区横に仮置きされていたX層を中心とする工事による排土を、遺物調査のため西よりの空き地にダンプで移動した。

・4月30日～5月2日

調査区西側のX層の残存する部分の壁面、シートバイル際の壁面及びトレンチの壁面を清掃し、写真撮影・実測を開始した。また、ヘドロ状になっていた工事掘削により攪乱された2次堆積土がいくらか乾いてきたため、その除去を南東よりから開始した。

・5月7日～5月10日

引き続き、トレンチ及び包含層の残存する部分の壁面の写真撮影・実測、また、工事掘削による2次堆積土の除去を行った。そして、それが終了した地点から包含層の掘り下げを開始した。

尚、花粉・珪藻分析等をバリノサーヴェに依頼し、5月10日サンプリングを実施した。

・5月13日～5月17日

今週から、工事により掘削された排土内の遺物調査を本格的に開始した。調査区内は、包含層の残存する部分では、X層掘り下げ後XI層上面で遺構確認を行った。溝状遺構1ヶ所、土坑状の不明遺構4ヶ所、ピットを8ヶ所検出し、写真撮影後、覆土の掘り下げを開始した。

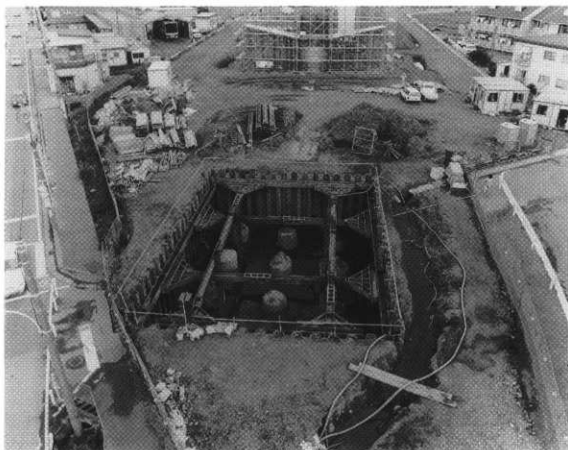
尚、プラントオパール分析を古環境研究所に依頼し、5月14日サンプリングを実施した。

・ 5月20日～5月24日

各遺構の掘り下げを続け、実測・写真撮影を行った。溝状遺構については、上層から土器、中層から木製品が多く出土したので、その出土状況を実測した。また、5月20・24日の両日、それぞれ高さ15m・26mの高所作業車を使い調査区全景及び各遺構等の写真撮影を実施した。

・ 5月27日～5月31日

各遺構を完掘し、実測・写真撮影をした。また、調査区の全体図を作成し、調査をすべて完了した。同時に、撤収作業を始め、資器材の搬出等を30日までにやり、31日、プレハブ・トイレ等の搬出をもって現地を完全撤収してきた。



調査区全景

第4章 調査の結果

第1節 基本層序

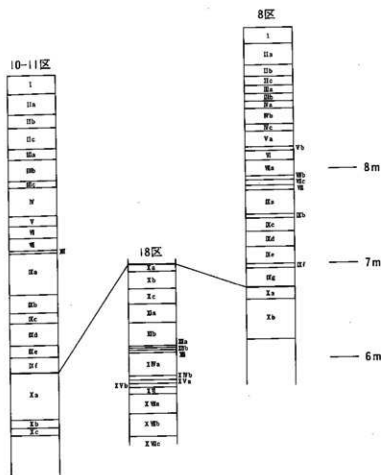


図4 土層柱状図

前述の通り、X層以上の層については既に剥ぎ取られてしまっていたため、X層以下の層位の検討を今回の調査では実施した。基本土層とした箇所は、調査区南壁にあたる部分である。以下、それぞれの層について簡単に記す。

- Xa ……黒褐色粘質土（所々砂質を含む）
- Xb ……黒色礫混土（明度低く、粘性強い）
- Xc ……黒色砂礫混土（粘性弱く、礫大）
- XIa ……暗青灰褐色シルト（炭化物有り）
- XIb ……青灰褐色シルト（XIaより明るい）
- XIIa ……暗青灰褐色砂質粘土（炭化物有り）
- XIIb ……暗青灰色粘土（部分的に明るい）
- XIII ……暗褐色粘土（XIIbに比べ暗い）
- XIVa ……青褐色粘土（やや砂質部分もある）
- XIVb ……明青灰色粘土（粘性強い）
- XVa ……暗青灰褐色粘土（XIVbよりかなり暗い）
- XVb ……黒色泥炭（上層は腐植土っぽい）
- XVI ……暗褐色シルト（植物遺体も少し含む）
- XVIIa ……青灰色シルト（XVIより粘性強い）
- XVIIb ……暗青灰色砂質土（小礫も含む）
- XVIII ……砂礫

第2節 遺構

遺構検出面は、隣接区の8区では5面、10区でも5面存在した。しかし、前述の通り、本区では弥生時代中期から古墳時代初頭の包含層であるX層より上層は既に削り取られた後だったため、遺構検出面はX層1面である。

遺構としては、溝1、ピット8、土坑あるいは溝状の不明遺構4を検出した。何れも、鋼矢板を打ち込まれた調査区の際にへばりつく形で残っていた部分からの検出であるため、完全な形での検出はできなかった。

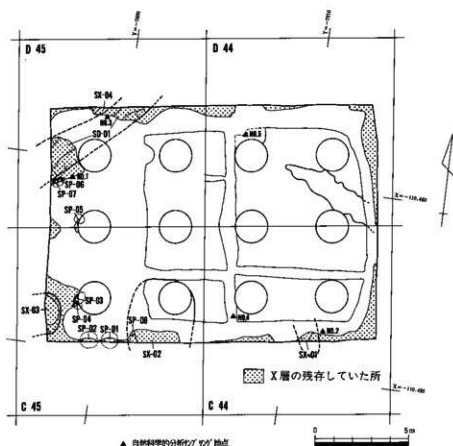


図5 18区全体図

<溝 SD01>

D45グリッドにおいて、調査区北西隅を切るような形で検出された。工事掘削による攪乱のため中間を断ち切られているが、18区調査区内では南側の縁で約5.6mの長さを想定できる。幅は1.2~1.8m、深さ約0.6mを測り、底面はほぼ平らな逆台形の断面形をとる。覆土は、X層に近い黒褐色粘土で、砂および小粒の礫、また材が混じる。特に、基底部は腐植質が多く、泥炭化しており黒みが非常に強くなる。

この溝は、川合8区のSD8617、10区のSX10606とその規模・形状・覆土とも似ており、川合遺跡報告書遺構編で報告されている「1号区画溝流路推測図」にほぼ合う位置にあることから、両者をつなぐ溝であることは間違いない。また前述書ではSD8617・SX10606は、取・排水の機能をもたない区画溝とされているが、本区で行った珪藻分析の結果、最下部層からは好汚濁性種や強腐水識別珪藻が多算していることがわかり、水の流れが殆どなかった区画溝の可能性を強めている。

遺物は、上層および下層に土器が多く、中層付近に木製品が多く出土した。土器は、弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけてのものがあるが、主体は弥生時代後期のものである。木製品は、殆どが割板状の加工木片である。

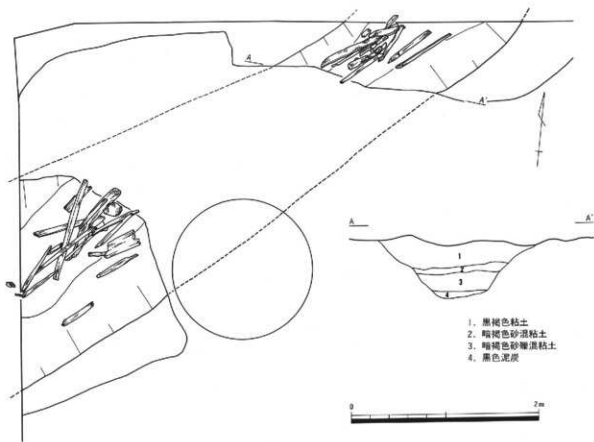


図6 SD01実測図

<SX01>

C44グリッド、調査区南側で検出された。鋼矢板際にわずかにへばりついた部分で確認されたため、平面的には広い部分で幅1mの落ち込みが、鋼矢板から多くて50cm検出されたのみである。深さは、約30cmを測る。南に向かいやや幅狭となるが、西側部分が鋼矢板からの水のしみこみにより崩壊していることもあり、形状等殆ど不明である。遺物は弥生時代中期後葉の壺の底部が1点出土している。

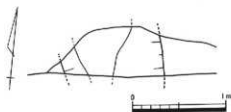


図7 SX01実測図

<SX02>

調査区南側の鋼矢板際に残る1m弱の張り出しから検出された。東側部分が崩落してしまっており、形状等ははっきりしない。しかし、その北側部の深く工事掘削されていた部分にあった数センチメートルの窪地をSX02の底部と考え、ほぼ真北に伸びる、推定で幅4mの溝状の遺構らしき形状が浮かび上がる。深さは、20~35cmを測り、西側の立ち上がりの部分には小穴SP08がある。6・7区、10区では計3基の方形周溝墓が発見されていることを考慮すると、SX02が方形周溝墓の東辺あるいは西辺の周溝である可能性は高い。

遺物は、弥生時代中期後葉の壺及び後期の壺・甕が出土している。

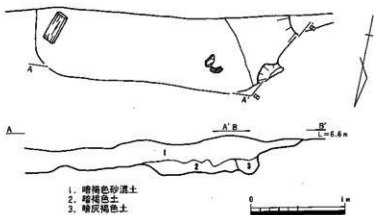


図8 SX02実測図

<SX03>

C45グリッド、調査区西側の最も包含層の残存していた部分から検出された。南北幅は最大で2.3mを測り、平均30cmの深さをもつ。覆土は、暗褐色粘土で大別すると2層に分けられ、下層は砂質が強くなる。西側部分が調査区外であるため、円形あるいは楕円形の土坑であるのか、そのまま同じ幅を持って真西に伸びていく溝なのか形状は不明である。

遺物は、弥生土器が出土しているが、後期の壺の底部1点を除くと中期に属する甕等の破片が多い。

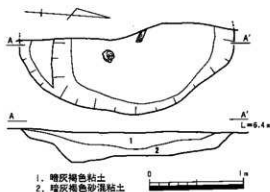


図9 SX03実測図

<SX04>

D45グリッド、調査区の北東隅で検出された。溝S

D01に東側部分を切られ、深さは約60cmを測る。鋼矢板側のわずかな部分での検出のため形状は判断できないが、花粉・珪藻分析で、底部付近の埋積土からは好流水性種が優占するという結果が得られていることから、SX04に関しては、土坑よりも溝、しかもある程度の流れをもったものであった可能性が強い。

なお、遺物の出土は一点も見なかった。

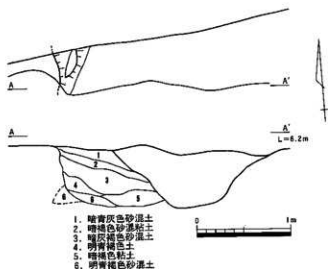


図10 SX04実測図

<ピット>

合計8のピットを検出したが、何れも全形の半分以上を工事掘削により削り取られてしまっていた。遺物は、SP04・06からは礎板が出土しているが、そのほかではみることができなかった。

・SP01、02

C45グリッド、調査区南側の鋼板杭際に並ぶように検出された。円の形状を呈すると想定すると、ともに0.9mの径となる。深さは、20cmを測る。

・SP03

SX03の東に位置する。橋脚構築のためのコンクリート基礎杭で殆どの部分は壊されている。そのため辺長は不明だが、掘り方は隅丸方形を呈している。深さは20cmを測る。

・SP04

SP03の埋積土を切り、掘り込まれている。形状は、SP03同様隅丸方形と考えられるが、SP03より辺長は長い。二段掘りがされ、下段には平均長29cm、幅4.0cm、厚さ1.5cmの四枚の割板が並べられ礎板として使われていたと考えられる。深さは、30cmを測る。

・SP05

コンクリート基礎杭脇にわずかに残ったX層下面で検出された。ほんの部分的な検出で形、大きさともはっきりしない。深さは、30cmを測る。

・SP06

D45グリッド、SD01のすぐ南で検出された。掘り方は、楕円形を呈すると推測される。40cm近く掘り込まれ、最大長30.7cm、幅14.9cm、厚さ1.7cmの礎板をもつ。

・SP07

SP06を切り、掘り込まれている。辺長40cmの隅丸方形の掘り方を呈し、深さは20cm弱を測る。

・SP08

SX02の東側立ち上りの部分から検出された。ほんのわずかな部分の検出のためはっきりとはしないが、円形を呈する径40cm程のピットと思われる。

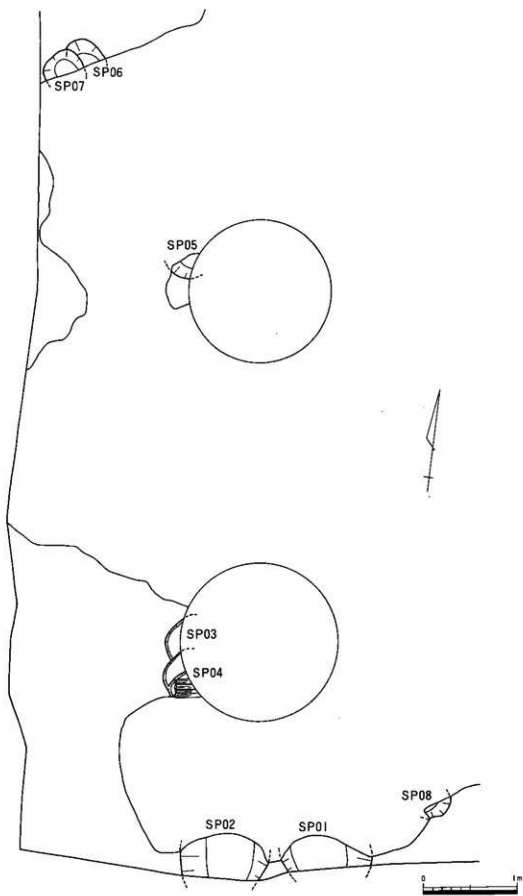


図11 ビット実測図

第3節 遺物

1. 土器

(1) 遺構出土土器

・SD01

溝状遺構SD01からは、壺、甕、高坏などが検出されているが、層位による型式差・時期差は認められなかったため、一括して扱うことにした。

1～5は折り返し口縁をもつ壺形土器である。1は下半に最大径のある下膨れ気味の無花果形のもので頸部に1段の縄文が施され、3個単位の円形貼付文が3箇所にみられる。2はやや太頸のもので4個単位の棒状貼付文を口縁部に、頸部には4個単位の円形貼付文を施す。3は外反のやや小さな口縁部をもつもので、内側に2個単位の棒状貼付文、肩部には4個単位の円形貼付文が付く。4は大きく外反するもので、折り返し部は肥厚化される。口縁下端には刻み、内面にはクシ状工具による羽状文が施される。5はやや太頸のもので、口縁端部に棒状貼付文が付く。

6は太い短頸で外反の小さい単純口縁である。器壁は厚く、内外面ともに粗いはけで調整されるが、外面はタテハケ、内面はヨコハケである。

7は複合口縁をもつ壺形土器で、口縁の立ち上がりは直立気味である。3個単位の中央に刻みの入る棒状貼付文が付き、口縁端部には櫛描き波状文が施される。

8は口縁を欠く無花果形の壺形土器で、肩部にクシ工具による刺突と3個単位の円形貼付文が付けられ、全体に不定方向のヘラミガキ調整が行われている。9は壺形土器の胴部で、下部に最大径をもつものである。

10～13は壺形土器の底部である。10は平底、11はやや上げ底状、12は厚みのある平底、13は中央部がやや窪むものである。

14・19は刻み目をもつ壺形土器である。14は「く」の字形に外反する口縁で、口縁後下端に刻み目が入る。19は口縁端部が外反するもので、胴部の張り小さい。

15、16、17は単純口縁の甕形土器である。15は球形を呈する胴部で、口縁端部のみ外反する。16は口唇部を面取りするものである。17は小型の台付甕で、長球状の胴部から緩やかに口縁部が外反する。

18、20、21、22は台付甕の脚台部である。18はやや内湾気味に広がり、接合部にはナデ調整がみられる。20は開きが小さく、端部は内湾し内側に張り出している。21は小型の脚台部で、端部は平坦に仕上げられている。22は、やや内湾気味に開く大型のものである。

23は鉢形を呈する高坏形土器である。口唇部は面取りされており、坏部は中央で緩やかに屈曲する。脚部は内湾気味に開いている。

6、12、20、21は弥生時代中期後葉に、他のものは弥生時代後期から古墳時代初頭に属するものと考えられる。

・SX01

図化できたのは28の壺形土器の底部のみである。外面は粗いはけで調整され、底部には縄代痕が残る。弥生時代中期後葉に位置付けられる。

・SX02

壺、甕を出土したが、3点を図示した。24は壺形土器で、太く短い頸部から、わずかに外に開く短い口縁部をもつ。頸部から肩部にかけ、5条単位の櫛描き横線文が2段施される。25は広口の大型壺で、

口縁端部を肥厚化して外反する。26は口縁に刻み目をもつ壺形土器で、胴上部に羽状文を構成すると考えられるヘラ描きが施される。

24、26は弥生時代中期後葉に、25は弥生時代後期に属するものと考えられる。

・SX03

多くの土器を出土したが、小片が多く図化できたのは3点のみである。27は口縁部に刻み目が付く壺形土器である。口縁部内面には半截竹管状工具による横からの刺突が施される。口縁部はわずかに外に開くが、直立気味に立ち上がる。28は口唇部を指頭押圧によりひだ状に成形したものである。30は壺形土器の底部である。平坦な底面には木葉痕が認められる。

いずれも弥生時代中期後葉に位置付けられるものである。

(2) 包含層出土土器

調査区内に打ち込まれた鋼矢板周辺に残った包含層内からは多くの土器を出土したが、図化できたものを一括して取り扱うことにした。

31は口縁の開きの小さい壺形土器である。2条の櫛描きによる横線文と端部を右上方に屈曲させる4条の櫛描き文が施される。32は外反する折り返し口縁をもつ壺形土器である。4個単位の棒状貼付文が口縁に付き、下端にはヘラ工具による刻み目が施されている。33は外方に開き気味の複合口縁をもつ壺形土器である。単位不明の棒状貼付文が付けられる。34は壺形土器の底部で、中央部がやや膨らみ不安定である。

35、36、37は口縁に刻み目をもつ壺形土器である。35は「く」の字に屈曲する口縁部で、胴の最大径は上位にある。36は口径18.9cm、器高16.6cm、胴最大径15.3cm、底径7.7cmを計測する平底の小型壺だが、口縁は緩やかに外反している。内外面ともに摩滅が著しいが、外面には粗いナメハケが残る。37は大きく外反する口縁部をもち指頭によりひだ状に成形されている。全体をナメハケ調整後、胴部上半にはヘラ描きの羽状文が施されている。

38は小型丸底壺で、最大径は口径にある。口径12.8cm、器高6.3cm、胴径9.6cmを計測する。浅い胴部高と口縁高はほぼ1:1である。39は壺形土器の口縁部で、「く」の字に屈曲し、直線的に立ち上がる。

40は黒褐色を呈する叩き壺の口縁部で、口縁外側が面取りされている。41は球形をなす胴部から「く」の字に屈曲する口縁部をもつ壺形土器である。42は口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚化した壺形土器で、口縁部に指頭圧痕が認められる。

43は高環で、脚部より下を欠いている。環部下方で屈曲し大きく外方に開く。44は高環の脚部でエンタシス状に膨らむ脚柱には3ヶ所に円孔をもち、裾部は大きく広がる。45は「ハ」の字に広がる高環の脚部である。3箇所に円孔をもつ。

46~49は手捏ね土器である。46は鉢形で口縁部を大きく屈曲させる。47は無頸のものであり、器壁が厚い。48は口縁を直立気味に立ち上げるものである。49は成形後丁寧にナメ調整を行ったもので、屈曲する口縁部をもつ。

弥生時代中期後葉~古墳時代前期にかけての時期に所属するものと思われる。

(3) 掘土内出土土器

橋脚工事により排出された土中より採集した遺物である。24点を図示する。

50は直立気味に立ち上がり端部がやや外反する壺形土器の口縁部である。51は口縁部を欠く小型の壺形土器である。頸部は太く、口縁に向かい大きく外反しているが、全体に歪みが大きい。52はやや厚め

の壺形土器の底部で底面には網代痕が認められる。53は中央部がやや窪む壺形土器の底部で、直線的に胴部が立ち上がる。54は大型の壺形土器の底部で、底面に木葉痕が認められる。55は底部の立ち上がり小さく胴部へなめらかに続く壺形土器の底部である。56は上げ底状の壺形土器底部で、底部の突出から水平気味に胴部が続いている。57は壺形土器の底部で胴部がやや垂直気味に立ち上がる。

58～64はS字状口縁台付甕である。58は口縁の屈曲部に列点文が施される。灰白色の色調を呈しており、搬入品である可能性が高い。62、64は口縁部直下より肩部が大きく張るものである。59・60・63は甕の張りの小さなものである。

65は「く」の字形に屈曲する単口縁をもつ甕形土器で、口縁部外面にモミ圧痕が認められる。66も単口縁の甕形土器だが、口端部がやや外反気味である。

67～69はS字状口縁台付甕の脚部でいずれも脚端部に粘土帯を貼り付け肥厚化している。67はやや外反して開くもの、68は台形状に大きく直線的に開くもの、69はやや内湾気味に開くものである。

70は器台形土器の器受部である。中央に稜をもち、口縁部は外反する。外面はヨコナデ、内面はヘラミガキによる調整が行われている。71は器台形土器の脚部である。器壁が厚く、端部は外に広がる。72も器台形土器の脚部で、裾部の広がり大きい。円孔が4箇所につけられているが、間隔は不均一である。

73は手捏ね土器で、口縁部がやや外に広がる。

年代観としては弥生時代中期後葉から古墳時代前期に所属すると考えられる。

2. 土鍾

包含層および排土から採集した3点の管状土鍾である。1は包含層より出土したもので、外面の一部を欠いている。長さ8.4cm、外径5.4cm、内径2.4cm、重量241.3gを計測する。外面に指頭圧痕が認められる。2は排土から検出したもので、完形である。長さ6.6cm、外径4.4cm、内径2.1cm、重量146.0gを計測する。外面はタテハケの後にナデ調整が行われている。3は排土から検出したもので約半分を欠損している。残存長4.1cm、外径4.9cm、内径1.05～1.55cm、重量103.6gを計測する。内外ともにナデ調整が行われ、一部にハケメが認められる。

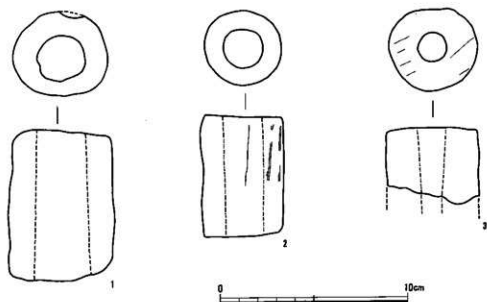


図12 土鍾実測図

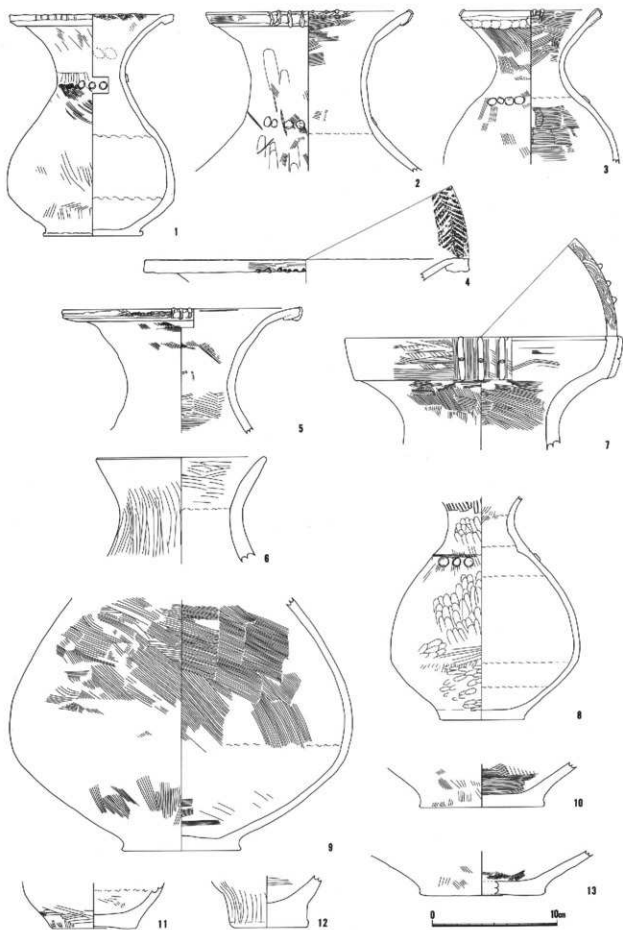


图13 遗構出土土器実測図(1)

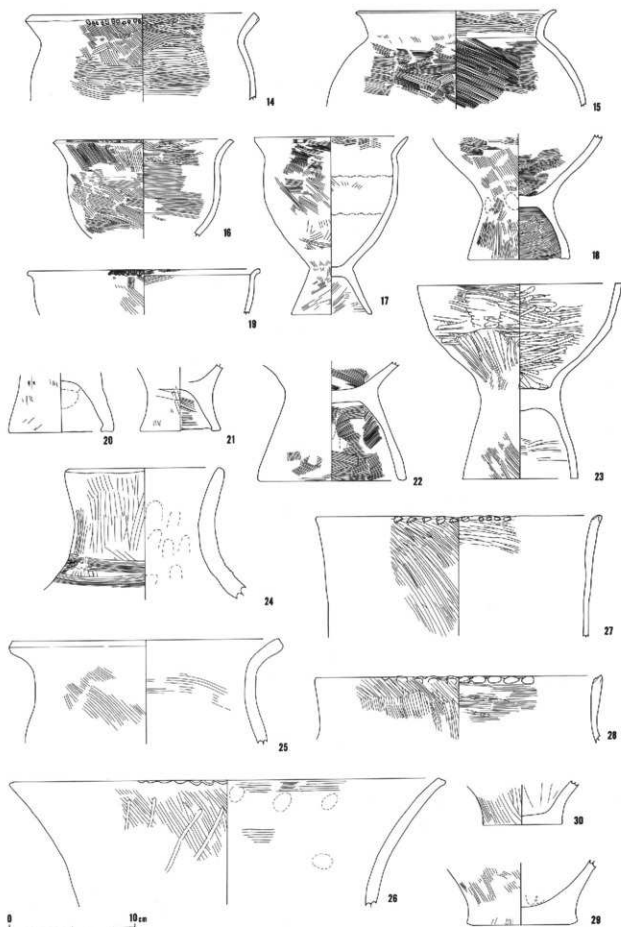


图14 遗構出土土器実測図(2)

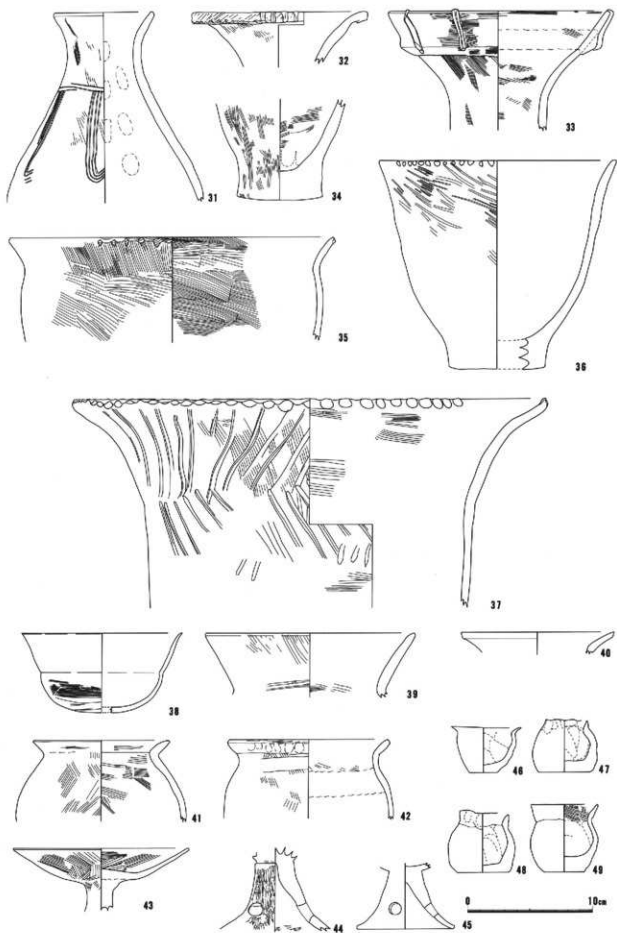


图15 包含层出土土器实测图

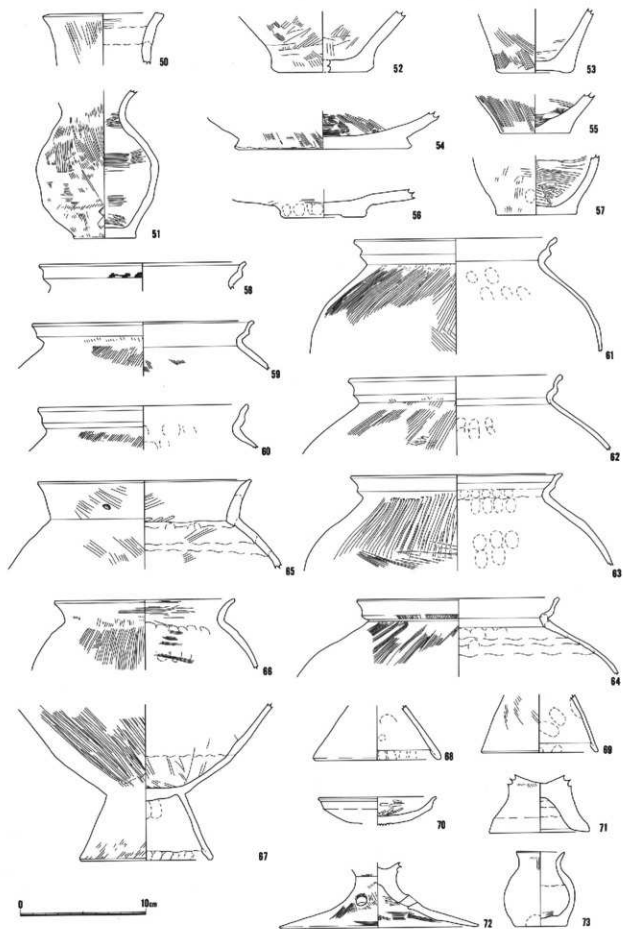


图16 排土採取土器実測図

| 番号 | 群形 | 出土地点 | 法量 (cm) | 形 態 の 特 徴 | 文 様 ・ 装 飾 の 特 徴 | 胎土・構成・色調 | 備 考 |
|----|-------|---------|---|--|--|---|-------------------|
| 1 | 壺 | SD 01 | 口径 13.1 口縁 17.7 胴径 13.6 底径 7.9 | やや太く短い胴部に大きく外反する折り返し口縁。胴部は下半に最大径を持つ無花草形を呈す。 | 口縁部内へツ工具による刻み目。口縁内側に縦文、胴部には縦文と3個単位の円形彫刻文を3ヶ所に施す。外面口縁・胴部はナナメハタ後ココナテ、胴部はナナメハタ(5条/cm)。 | 胎土 砂粒・小石・長石を含む。 構成 灰 色調 明灰褐色 | 口縁約1/3欠損。 |
| 2 | 壺 | SD 01 | 口径 16.2 | 太腹で大きく外反する折り返し口縁。 | 口縁部に4個単位の帯状彫刻文。胴部には4個単位の円形彫刻文を施す。外面ナナメハタ後ナテ。内面(口縁部)方向不定のハタ(10条/cm)。胴部から胴部にかけてココナテ後ナテ。 | 胎土 若干の砂粒・長石・長石を含む。 構成 灰 色調 浅黄褐色 | 内面に赤料。口縁一部約1/3残存。 |
| 3 | 壺 | SD 01 | 口径 10.6 | 肩がやや張る外反の小さい折り返し口縁。 | 口縁内側に3個単位の帯状彫刻文。胴部には4個単位の円形彫刻文。外面彫刻タテハタ(5条/cm)。内面ココナテ(8条/cm) 胴部ココナテ。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 構成 灰 色調 内面 黄褐色 | 口縁一部約2/5残存。 |
| 4 | 壺 | SD 01 | 口径 25.3 | 大きく外反する折り返し口縁。 | 1) 口縁下部にハタ工具による刻み目。口縁内側にツ工具による刻文。外面胴部ナナメハタ後タテハタ。 | 胎土 砂粒・黄色粘土・長石を含む。 構成 灰 色調 浅褐色 | 口縁約1/12残存。 |
| 5 | SD 01 | 口径 18.8 | やや太腹の外反する折り返し口縁で、胴の張りは大きい。 | 口縁部部に単位不明の帯状彫刻文。外面ナメハタ(10条/cm) 後ココナテ。内面(口縁部)ココナテ後ココナテ。胴部ココナテ(6条/cm)。 | 胎土 砂粒を若干含む。 構成 灰 色調 浅褐色 | 口縁約1/6残存。 | |
| 6 | 壺 | SD 01 | 口径 13.0 | 太い短頸で外反の小さい単純口縁。 | 口縁部ココナテ。外面彫刻タテハタ(4条/cm)。内面口縁下部ココナテ(4条/cm)。 | 胎土 砂粒を多く含む。 構成 灰 色調 外面 灰白色 内面 内面 黄褐色 | 口縁一部約1/5残存。 |
| 7 | 壺 | SD 01 | 口径 21.6 | 外反する太腹から腹出し、肩より胴部に立ち上りがかる筒状口縁。 | 中央部にナメハタ工具による刻み目のある3個単位の帯状彫刻文。口縁部には縦方向の帯状彫刻文が施される。口縁外面ナメハタ後ココナテ。外面ナメハタ。胴部下方はタテハタ後ココナテ。内面ココナテ後ココナテ。胴部ココナテ(9条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石を多く含む。 構成 灰 色調 灰白色 | 口縁一部約1/4残存。 |
| 8 | 壺 | SD 01 | 胴径 15.0 底径 6.4 | 胴下半に最大径を持ち、やや胴の張る解在形を呈す。 | 肩部にツ工具による刻文。3個単位の円形彫刻文。外面彫刻タテハタ。中央へツケズリ。肩より胴上部ナメハタの後へツケミダシ。胴中央一部ココナテハタミダシ。胴中央一部ココナテハタミダシ。 | 胎土 砂粒・小石・長石を含む。 構成 灰 色調 灰白色 | 口縁部欠損 |
| 9 | 壺 | SD 01 | 胴径 27.2 | 胴下半に最大径を持つ無花草形。 | 外面胴部タテハタ(7条/cm) 後ナテ。内面胴部ナメハタ(8条/cm)。胴部不定方向のハタ後ナテ。 | 胎土 長石・黄色粘土・赤色粘土を含む。 構成 灰 色調 外面 黄褐色 内面 黄褐色 | 胴部1/3欠損。 |
| 10 | 壺 | SD 01 | 底径 9.8 | 平底の短頸。胴部は大きく広がる。 | 外面タテハタ後ナテ。内面方向不定のハタ。下腹にはココナテ(7条/cm)。 | 胎土 長石・黄色粘土・赤色粘土を含む。 構成 灰 色調 外面 浅褐色 内面 黄褐色 | 胴部1/4欠損。 |
| 11 | 壺 | SD 01 | 胴径 6.6 | やや上げ窓状の腹部で、緩やかな曲線を描く胴部に破く。 | 外面タテハタ後へツミダシ。胴部ナテ。内面不定方向のハタ。 | 胎土 長石・黄色粘土・赤色粘土を含む。 構成 灰 色調 外面 内面 黄褐色 | |
| 12 | 壺 | SD 01 | 胴径 5.6 | 細く厚みのある平底の短頸で、緩やかに広がる胴部が破く。 | 外面彫刻タテハタ(4条/cm)。内面ココナテ後ナテ。 | 胎土 7-8程度の小石を多く含む。 構成 黄褐色 色調 黄褐色 | |
| 13 | 壺 | SD 01 | 底径 9.2 | 中央部がやや窪む短頸で、大きく広がる胴部が破く。 | 外面ハタ後ナテ。内面方向不定のハタ(11条/cm)。 | 胎土 長石・赤色粘土・赤色粘土を含む。 構成 灰 色調 外面 浅黄褐色 内面 黄褐色 | 胴部1/2残存。 |
| 14 | 壺 | SD 01 | 口径 17.8 | 緩やかに「く」字に屈曲し、口縁は小さく外反する。 | 口縁下部にハタ工具による刻み目。口縁部にツ工具による刻文。外面彫刻タテハタ。内面ココナテ(8条/cm・5条/cm)。 | 胎土 小石・長石・黄色粘土を含む。 構成 灰 色調 外面 黄褐色 内面 内面 黄褐色 | 口縁部1/6残存。 |
| 15 | 壺 | SD 01 | 口径 16.0 | 頸部を呈する胴部に緩やかに屈曲する短頸。口縁部のみやや外反する。 | 口縁外面ココナテ後ナテ。胴部ナメハタ(8条/cm)。内面口縁ココナテ(8条/cm)。胴部ナメハタ(12条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 構成 灰 色調 内面 黄褐色 | 口縁部にすずり付。 |
| 16 | 壺 | SD 01 | 口径 13.8 | 胴の張り小さい半球状を呈し、取付した口縁はわずかに外反する。 | 外面口縁一部彫刻タテハタ(5条/cm)。胴部ココナテ(10条/cm)。内面ココナテ(9条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 構成 灰 色調 黄褐色 | 口縁約1/6残存。 |

表2 遺構出土土器観察表(1)

| 番号 | 器形 | 出土地点 | 流量 (cm) | 形影の特徴 | 文様・装束の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 備考 |
|----|----|--------|---|--|---|--|---------------------------------|
| 17 | 壺 | SD 0 1 | 口径 12.2 器高 14.3 脚径 10.6 底径 6.4 | 狭りの小さい長球状の胴部から口縁は緩やかに「く」字形に外反する。胴部は小さく端部がやや外反する。 | 外周ナメメ・タテハケ (12条/cm)、内面口縁部・胴上部にヨコハケの風流。 | 胎土 5mmまでの砂粒・小石を多く含む。 焼成 やや不良 色調 淡赤褐色 | 内外面とも刷毛・磨削が美しい。外蓋にすず付。口縁部1/6残存。 |
| 18 | 壺 | SD 0 1 | 口径 8.2 | 胴部がやや内湾する胴台部で、緩やかに広がる胴部が続く。 | 外周胴部及び胴上部にタテハケ (8条/cm)、胴中央部はヨコハケ (8条/cm)、胴合部はナメ。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 焼成 良好 色調 土に近い黄褐色 | 胴台部1/2残存。 |
| 19 | 壺 | SD 0 1 | 口径 18.4 | 口縁部は外反し、胴部は強らずに下方へ続く。 | 口縁にはハケ工具による列目、外周ナメメハケ (6条/cm)、内面口縁ナメメハケ後ヨコナデ、胴部ヨコハケ (13条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 焼成 良好 色調 淡赤褐色 | 口縁部1/10残存。 |
| 20 | 壺 | SD 0 1 | 口径 8.2 | 狭りの小さい台形を呈し、端部は若干円湾して内面に張り出す。 | 外周一部にハケメ、内面ヨコハケ後ナメ。 | 胎土 砂粒・長石を多く含む。 焼成 良好 色調 外周 黄褐色 内面 灰白色 | 外周部残。胴台部1/5残存。 |
| 21 | 壺 | SD 0 1 | 口径 6.2 | 小型で、広がりは小さく端部は平直。 | 外周一部にハケメ、内面ヨコハケ (9条/cm)。 | 胎土 砂粒を多く含む。 焼成 普通 色調 淡褐色 | 外周部残。胴台部1/5残存。 |
| 22 | 壺 | SD 0 1 | 口径 11.8 | やや内湾気味に開く。 | 外周一部にハケメ (7条/cm)、内面ヨコナメメハケ (7条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石・石英を含む。 焼成 良好 色調 淡黄褐色 | 外周部残。胴台部1/7残存。 |
| 23 | 高杯 | SD 0 1 | 口径 16.2 器高 15.6 底径 9.2 | 深い鉢形を呈する杯部で、中位で緩やかに屈曲し、口唇は水平に両取りされる。胴部は大きくやや内湾気味に開く。 | 1) 杯部ナメメハケ、口縁部はヨコハケ (10条/cm)、外周杯部上半にヨコハケミズギキ、下半はタテハケミズギキ、胴部はナメメハケ後一部へツミズギキ、蓋合部はナメメハケ後ナメ内面口縁ヨコナデ、杯部ヨコハケミズギキ、胴部ヨコハケ後ナメ。 | 胎土 砂粒・長石・石英・雲母を含む。 焼成 良好 色調 土に近い黄褐色 | 杯部・胴部に残存。杯部1/2残存、胴部一部欠損。 |
| 24 | 壺 | SX 0 2 | 口径 11.8 | 太い頸から緩やかに短い口縁が外に広がる。 | 頸部から胴部にかけて5条単位で巻巻き幾何学を2段施す。外周細いハケメ (4条/cm)、内面頸部平直。 | 胎土 長石・黒色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 良好 色調 土に近い褐色 | 口縁部1/4残存。 |
| 25 | 壺 | SX 0 2 | 口径 21.2 | 胴部は狭りが小さく、直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚化して外反する。 | 口縁部ヨコナデ、外周胴部一部ナメメハケ (7条/cm)、内面胴部ヨコナデ、胴部ヨコハケ (6条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石を多く含む。 焼成 良好 色調 淡赤褐色 | 口縁部1/4残存。 |
| 26 | 壺 | SX 0 2 | 口径 33.8 | 口縁部は直線的にやや外反する。 | 口縁部にハケ工具による列目、胴上部にハケ後ミズギキを施す。外周ナメメハケ (4条/cm)、内面ヨコハケ後ナメ。 | 胎土 長石・黒色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 良好 色調 淡赤褐色 | 口縁部1/10残存。 |
| 27 | 壺 | SX 0 3 | 口径 22.6 | 口縁部はわずかに外方へ開くが、直立気味に立ち上がる。 | 口縁部外周にハケ工具による列目、内面には半葉竹笠状工具による狭方向からの刷削、外周細いナメメハケ (5条/cm)、内面口縁部直下にヨコハケ (7条/cm)、下部はヨコナデ。 | 胎土 砂粒・長石・雲母を含む。 焼成 良好 色調 黄褐色 | 口縁部1/12残存。 |
| 28 | 壺 | SX 0 3 | 口径 22.6 | 狭りの強い胴部から直線的に口縁部が立ち上がる。 | 口縁部指環押付による成形、外周口縁部直下はナメメハケ、下部はタテハケ (9条/cm) 内面ヨコハケ (9条/cm)。 | 胎土 砂粒・長石・雲母を含む。 焼成 良好 色調 土に近い赤褐色 | 口縁部1/9残存。 |
| 29 | 壺 | SX 0 3 | 口径 8.8 | 平直な直前に緩やかに広がる胴部が続く。 | 外周ナメメハケ (5条/cm)、胴部ヨコナデ、内面に指環成形。底面に木葉状。 | 胎土 多くの砂と若干の長石・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 明褐色 | 内周部残。 |
| 30 | 壺 | SX 0 1 | 口径 6.3 | 小さい平直な胴部に緩やかに立ち上がる胴部が続く。 | 外周細いタテハケ (4条/cm)、内面ナメメハケに刷削。 | 胎土 砂粒・長石を含む。 焼成 普通 色調 明赤褐色 | |

表3 遺構出土土器観察表(2)

3. 石器

磨製石鏃、扁平片刃石斧、太型蛤刃石斧、敲石、剥片、軽石等も含め計22点の出土を見た。石材の供給源については川合遺跡報告書石器編で詳しく報告されるが、主に安倍川流域山地に分布する「瀬戸川層群」である。図には、剥片・何の加工もない軽石を除く12点を掲載した。以下、簡単にそれぞれについて記す。

1については、のみ形石斧あるいは細身の磨製石鏃とも考えられるが、刃部・基部ともに欠損しており器種については不明である。両主面、両側面ともに研磨が施されている。石材は、黒色の粘板岩である。

2は、石剣としての可能性を残すが、一応磨製石鏃と考えた。基部が欠損しており、基部形態や穿孔の有無は不明である。明確な稜をもたず、断面形は薄い凸レンズ形を呈する。両主面とも丁寧に研磨が施されている。石材は、暗緑色のやや珪質がかった輝緑凝灰岩である。

3～7は、扁平片刃石斧である。3・5・7については完製品、4・6については未製品と考えた。3は、中央部が肉厚で、基部・刃部に向け薄くなる。刃部の研ぎ出しは、約0.6cmの部分からされている。右側面は折損面と思われることから、もっと大型だったものの旧側面を刃部加工して再利用したものとも考えられる。石材は暗赤紫色の輝緑凝灰岩で、川合遺跡で最も多く使われているものと同じである。4は、自然面を残す輝緑凝灰岩の一次剥片を使用した未製品である。剝離調整を数回試みた整形段階で廃棄されたものと思われる。5は、非常に扁平で、両主面、側面とも研磨が施されている。刃部は摩滅が激しく刃こぼれもあり、また使用の衝撃により主面の大きな剝離があるためはっきりとしないが、後主面から刃部の研磨が行われている痕跡もあり、両刃の可能性もある。3～7の5点の中では唯一、粘板岩製である。6は、両主面、左側面に一部研磨が施されている。また、右側面には敲打痕があり、刃部も一部整形はされているが完製品ではない。前主面には自然面も残っており、研磨工程の途中で廃棄されたものと思われる。石材は、5と同様唯一の珪質砂質頁岩である。7は完製品で、使用による刃こぼれも見られる。刃部は右側面に向け長さを増し、研ぎ出しは0.8～1.3cmと斜めになっている。側面は、左側面が丁寧に研磨されているのに対し、右側面は剝離面と一部敲打痕を残しており、やや粗いつくりのまま使用されたものようである。石材は、暗赤紫色の輝緑凝灰岩である。

8は、太型蛤刃石斧の未製品と考えた。採集してきた柱状石の形状を生かし、そのまま敲打調整を始めている。細かい敲打痕がそのまま残り、敲打調整の段階で廃棄されたものと思われる。石材は、硬質の中粒砂岩である。刃部の製作がされていないので何とも言えないが、大型の扁平片刃石斧の未製品と捉えてもおかしくはない。

9は、砂質粘板岩製の打製石斧である。一次剥片を使用しており、後主面には自然面を多く残している。形状は楕形で、右側面に向け厚みを増す。刃縁に対し直交する使用痕が見られ、一部刃こぼれしているが完形品である。石材の選択、自然面を残す制作法等川合遺跡出土の打製石斧の特徴的なものと言える。

10は、球形の敲石である。径約5.2～6.2cmを計り、指をかけたと思われる部分を除くほぼ全面に敲打使用痕を残している。石材は、灰緑色の凝灰質チャートで硬質のものが使用されている。

11・12は、砥石に利用した軽石と思われる。11は、半楕円球形で、平坦面に幅0.6～1.0cm、深さ0.2～0.3cmの2条の明確な線状痕と、他3条の線状痕らしきものをもつ。2条の線状痕は、緩やかなU字形の断面を呈する。12は、1条の線状痕と2つの穿孔がある。線状痕と孔のある面は平に成形されており、線状痕は11に比べV字形の鋭い切れ込みである。孔は、竹管状のもので回転させ据えられており、0.5cmと0.8cmの径で、それぞれ0.2cm、0.4cm程の深さをもつ。

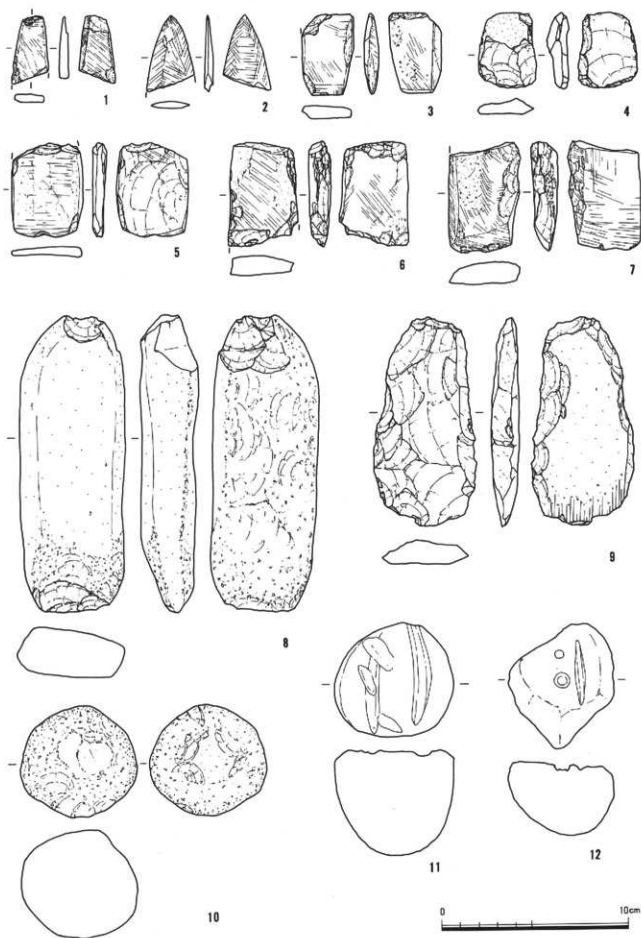


图17 石器实测图

| 遺物番号 | 出土地点・遺構 | 種別 | 最大長mm | 最大幅mm | 最大厚mm | 重量g | 色 | 石質 | 備考 |
|------|------------------|--------|--------|-------|-------|-------|------|-----------------|---------------------|
| 1 | D 3 5 G | 不明 | (33.9) | 19.1 | 5.4 | 4.9 | 黒色 | 粘板岩 | のみ型石弁あるいは磨製石鏃か？ |
| 2 | 〃 | 磨製石鏃 | (40.6) | 24.9 | 4.3 | 4.4 | 暗緑色 | 輝緑凝灰岩 (やや柱質) | 欠損、先端部のみ残存、石刺の可能性有り |
| 3 | 排土 | 扁平片刃石弁 | 44.5 | 27.1 | 8.6 | 16.6 | 暗赤紫色 | 輝緑凝灰岩 (やや柱質) | 刃部一部欠損 |
| 4 | 〃 | 〃 | 40.0 | 30.4 | 10.8 | 14.8 | 〃 | 輝緑凝灰岩 (やや柱質) | 未製品 |
| 5 | D 3 4 G | 〃 | (49.6) | 37.6 | 7.6 | 22.4 | 黒色 | 粘板岩 | 基部欠損、刃部一部破損 |
| 6 | SX-0 2 (バイル側) | 〃 | 55.6 | 36.5 | 12.5 | 40.0 | 黒色 | 柱質砂質頁岩 | 未製品 |
| 7 | C 3 4 G | 〃 | (57.4) | 37.7 | 13.9 | 52.7 | 暗赤紫色 | 柱質輝緑凝灰岩 | 基部欠損 |
| 8 | 排土 | 蛤刃状石弁 | 158.0 | 56.1 | 30.0 | 242.2 | 暗灰色 | 硬質中粒砂岩 | 未製品、細かい敲打痕 |
| 9 | 〃 | 打製石弁 | 110.5 | 53.9 | 16.0 | 118.7 | 黒色 | 砂質粘板岩 | |
| 10 | SX-0 2 (バイル側) | 敲石 | 57.2 | 61.9 | 57.3 | 298.2 | 灰緑色 | 凝灰質チャート | 球形 |
| 11 | SX-0 3 | 敲石 | (52.6) | 65.1 | 59.8 | 51.6 | 灰白色 | 軽石 | 楕円球形浮子の可能性有り |
| 12 | SD-0 1 (バイル側) | 〃 | 63.4 | 55.1 | 48.8 | 24.1 | 〃 | 〃 | 楕状底、未穿孔有り |
| 13 | D 3 5 G | 剥片 | 75.2 | 53.8 | 4.9 | 27.0 | 黒色 | 千枚岩質粘板岩 | |
| 14 | 排土 | 〃 | 30.5 | 14.0 | 6.1 | 3.2 | 〃 | 輝緑凝灰岩 | |
| 15 | 〃 | 〃 | 49.5 | 26.9 | 7.9 | 17.1 | 暗灰色 | 粘板岩 | |
| 16 | SX-0 4 | 〃 | 47.8 | 53.4 | 12.2 | 32.5 | 暗赤紫色 | 輝緑凝灰岩 | |
| 17 | 排土 | 〃 | 46.2 | 48.6 | 13.2 | 24.2 | 〃 | 輝緑凝灰岩 | |
| 18 | 〃 | 〃 | 33.0 | 23.5 | 8.6 | 10.6 | 淡灰色 | チャート | |
| 19 | C 3 4 G | 軽石 | 66.2 | 62.6 | 39.7 | 38.6 | 灰色 | 軽石 | |
| 20 | 排土 | 〃 | 49.8 | 45.5 | 29.3 | 16.2 | 淡灰色 | 〃 | |
| 21 | 〃 | 〃 | 43.2 | 31.8 | 16.6 | 7.8 | 灰褐色 | 風化軽石 | 軟質凝灰岩？ |
| 22 | SX-0 2 (バイル側) | 円鏃 | (31.6) | 16.7 | 9.9 | 7.4 | 暗赤紫色 | 輝緑凝灰岩 (やや柱質) | 擦痕 |

表 4 石器計測表

第5章 ま と め

1. 調査対象地

静岡市川合字大坪1,059-1番地地先。市道川合5号線にかかる部分。静清バイパス（川合地区）橋脚番号P200基礎掘削地点、静清バイパス道路中心線STANo.458～459。延長17.5m。調査対象面積は東西17.5m×南北12.5m=218.75㎡≒219㎡

2. 過去の調査

川合遺跡全体の東西の範囲は、東は長尾川の右岸、西は巴川左岸付近までの延長約870mである。建設省による静清バイパス建設工事にともなう発掘調査委託事業として昭和58年度に静岡市教育委員会が予備調査。その後静岡県埋蔵文化財調査研究所が昭和59年度から61年度まで1区から16区まで発掘調査。上層から発見された官衙遺構は保存対象となったが、下層（V～X層）について13区の橋脚3ヶ所にかかる部分だけの調査を昭和62年度に実施された。

昭和59～62年度の調査結果、川合遺跡の性格は主に次のような3地区に大別し理解されている。

①宮下遺跡地区

1～4区上層 奈良～平安時代集落 中世・近世水田

②川合遺跡地区

6～13区下層 弥生～古墳時代集落・墓域・水田等

③内荒遺跡地区

12～16区上層 平安時代官衙遺構等 中世・近世水田

これまでの調査は、現道部分は橋脚がまたぐのでバイパス工事が及ばないものと考えられ調査対象から除外していた。しかし、平成2年度に行われた14区の橋脚位置の変更協議中に13区と14区間の市道川合7号線に橋脚（P210）がかかることがわかり、17区として6～7月と1～2月の2回に分けて調査した。内荒遺跡地区は安倍郡衙とも考えられる平安時代の官衙遺構が発見され、保存協議がすすめられていたもので、重要な地点である。

3. 18区発掘調査の契機

平成2年度末、川合遺跡地区に該当する8区と10区間の市道川合5号線において橋脚（P200）の基礎工事が行われ、土器などの遺物が散乱する事態が発生した。掘削は現地表面から約4mもあり下層にまで及んでいるものの残存する遺構・遺物が予想されるとともに、弥生時代から古墳時代にかけて展開した川合遺跡の中心部にあたるため、静岡県教育委員会文化課と建設省中部地方建設局静岡国道工事事務所が連絡・協議の結果、工事を一時中断し、川合遺跡18区として平成3年度当初に約2ヵ月間の予定で埋蔵文化財の調査を実施する事になった。これが、今回の調査開始状況である。

4. 調査結果

今回の調査対象地は、すでに工事がすすみ鋼矢板土留め支保工が施工され、地表面からおおよそ4mの深さまで、すでに掘削されてしまっていた。今までの調査では川合遺跡地区の基本土層は地表下4～5mまでの間がI層～X層まで区分され、この中から近世の水田2面、古墳時代中期Ⅱ～後期Ⅰ・Ⅱの

遺構3面、弥生時代中期～古墳時代初頭と古墳時代中期Ⅰの遺構2面が発見され、合計7面の調査が実施されていた。川合遺跡18区では工事によってすでに上層が破壊されており、古墳時代以降の遺物包含層や遺構面は滅失していた。かろうじて最下層のX層の包含層が一部残存していたほか溝状遺構や柱穴・土坑など一部の遺構が確認された。

隣接する川合遺跡7区8区10区は微高地上にあたり、弥生時代中期の方形周溝墓をはじめ溝状遺構や掘立柱建物などの集落遺構・墓地が発見されるとともに多量の土器や石器製作資料・板状鉄斧・銅製の腕輪・指輪や銅鏃など他の遺跡よりも卓越した資料が発見されている。

川合遺跡18区の溝状遺構は8区(SD8617)と10区(SX10606)の溝状遺構に連続するものである事が確かめられるとともに、方形周溝墓の外周をとりまく溝と考えられる土坑が発見され、墓域の広がりも確認されるなど、川合遺跡の全体像を把握する上で欠かせない資料となった。また、川合遺跡地区で今までに最も濃密に土器などが包含されているX層は、今回の工事によってかなり掘削され残土として積み上げられていた。残土の中で遺物が最も濃密な部分の土を再発掘したところ、完形品の土器3個体や偏平片刃石斧2点・太型蛤刃石斧をはじめ、多くの遺物を採集する事ができた。

自然科学的分析の結果から、川合遺跡18区は周辺は湿地～沼沢地のような水域環境であったが縄文時代後期～晩期以降には微高地地形が成立、遺跡の成立した弥生中期の基盤層XI a層、遺物包含層X c層の堆積した時期には常に大気に曝され乾燥していた環境であると指摘されている。これは、考古学的所見とも一致するものと考えられる。

弥生中期～古墳時代前期の包含層X層から3,200～5,100個/gという比較的高い数値の稲のプラント・オパールが検出された。また基盤層最上面のXI a層からも3,200個/gが検出されているが、耕作土とは観察できないので集落域への稲藁の持ち込みという考え方が提示されている。さらに基盤層のXI a層からも少量であるが700個/g検出されている。これは、上下の土層からはまったく検出されていないので、弥生中期中葉以前の土層に含まれるプラント・オパールとして少量であるが特筆されるものであり、今後の検討課題としておきたい。

5. 結論

川合遺跡18区の調査は、工事により大半が破壊されていたものの、川合遺跡集落の中心部でもあり、その一端をのぞかせ多少の成果をあげる事ができた。工事を中断しての発掘調査は、建設工事をする側にとっても、埋蔵文化財の保護する側にとっても並々な努力と対応を迫られるものである。川合遺跡にとって災いであったが、関係者各位の協力と努力によって今回の調査が成立したことを記しておきたい。

自然科学的分析

18区の調査では、5箇所の地点を設置し(図5参照)、放射性炭素年代測定・微化石分析(珪藻分析・花粉分析)・材同定・種実同定をバリノサーヴェイ株式会社、プラントオバール分析を古環境研究所に委託し実施した。以下、その報告の概略を記す。

<バリノサーヴェイ株式会社報告(抄)>

1. 放射性炭素年代測定結果

| Codo No. | 試料採取地点 | 試料の質 | 年代(1950年よりの年数) |
|-----------|-------------|------|-----------------------------|
| GaK-15894 | 第3地点SD01-4層 | 出土材 | 2350 ± 180 y.B.P.(400 B.C.) |
| GaK-15895 | 第4地点XIb層 | 出土材 | 2860 ± 100 y.B.P.(910 B.C.) |
| GaK-15896 | 第5地点XVb層 | 黒色粘土 | 3350 ± 90 y.B.P.(1400 B.C.) |

2. 第1・2地点標準土層の珪藻化石・花粉化石からみた古環境変遷

本地点の珪藻殻の保存状態は、完形殻の産出比率が50%~75%と比較的高い。したがって、ここで得られた珪藻化石群集は、付近の堆積環境を反映していると考え、以下の考察を行った。

珪藻分析の結果、常に大気に曝された特殊な環境に適応して生育する陸生珪藻と水中で生育する水生珪藻の比率に注目すると、大まかな堆積環境が把握できる。陸生珪藻は、現在の地表面で70%~80%を占めることが確かめられている(伊藤・堀内, 1991)。今回の結果では、第1地点X層と第2地点XIa層において陸生珪藻が優占する。これ以外の堆積層では、陸生珪藻と水生珪藻とが共に高率に産出する。また、水生珪藻の生態性や環境指標種群の特徴に注目すると、両地点とも試料や層位ごとに大きな差はなく、塩分については不定性種、水素イオン濃度については好アルカリ性種、水の流動に対しては流水不定性種が優占する。環境指標種群についてみると河川沿いの段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地に集中して生育する中〜下流性河川指標種や、水深が浅く一面に水生植物が繁茂する沼沢や湿地に優勢な沼沢湿地付着生種および比較的水深の浅い水域を指標する種群が多い。

以上のことから、X層~XI層が堆積した頃は、しばしば離水し乾燥するような湿地や沼沢のような環境下にあったことが推定される。なお、珪藻化石の産出の少なかった堆積層についても、その産状が珪藻化石の多産する試料と近似することから、堆積環境はほぼ同様であったことが予想される。ところが、XIa層とXc層が堆積した弥生時代中期~古墳時代初頭前後の頃になると、調査地点は常に乾燥した好気的環境下にあったと推定される。その後、調査地点の周辺は、再びしばしば離水し乾燥するような湿地や沼沢のような状態になったと推定される。

一方、花粉化石は保存状態が悪く、何らかの原因により分解・消失したと考えられる。花粉化石が検出されなかった原因としては、本調査区が堆積時あるいは堆積後にしばしば乾燥するような好気的環境であったために、酸化などによって分解・消失したものと推定される。

3. 第3地点の溝(SD01, SX04)埋積物中の化石から推定される周辺環境

(1) 珪藻化石からみた堆積環境

遺構内の完形殻の出現率は、75%前後で高い。したがって、ここで得られた珪藻化石群集は、付近の

堆積環境を反映していると考えられる。

SX04の底部脇からさらに掘り込まれたような部分からは、水生珪藻と陸生珪藻がほぼ同じ割合で産出する。この組成は、SX04底部の埋積土(SX04-5・6層)から産出する珪藻化石群集と明かに異なっており、第1・2地点の珪藻化石群集に近似している。よって、この部分は、SX04の埋積土と異なったものと推定でき、SX04の壁の崩落などによって二次的に堆積した可能性がある。

SX04の珪藻化石の産状は各試料で異なっており、堆積環境が変化したことが予想される。つまり、SX04の基底に堆積したSX04-5・6層では好流水性種が優占することから、流水域で堆積したと考えられる。ところが直上のSX04-4層では、水生珪藻と陸生珪藻がほぼ同じ割合で産出することから、本層が堆積した頃は流水の影響が弱まり離水することもある湿地のような堆積環境であったと推定される。SX04-3層が堆積する頃は水生珪藻が優占することから、再び水没したことが考えられる。特に本試料からは、ウケクサを好んで付着する珪藻が優占したこと、ウケクサの存在も示唆される。ところが上位のSX04-2・1層になると、陸生珪藻が現在の地表面とほぼ同じ割合で優占することから、本遺構内は完全に離水し、常に大気に曝されるような好気的環境へと変遷したことが考えられる。おそらくこれらの埋積土は、周囲の乾いた場所から風成堆積したか、あるいは崩落等により流入堆積したことが予想される。

SX04の堆積物を切って構築される溝(SD01)の堆積環境は、最下部層4層から好汚濁性種や強腐水藻類珪藻が多産することから、溝が構築された直後は比較的富栄養水域であったと推定される。しかし、3層から1層が堆積する頃になると、陸生珪藻が50%~60%と水生珪藻より多産したことから、溝の埋積が進むにつれて、溝内は徐々に陸生珪藻も繁茂するような半乾半湿の湿潤な環境へと変遷したと考えられる。なお、SD01-4層の放射性炭素年代測定の結果、 2350 ± 180 y.B.P.の年代値が得られている。一方、溝埋積土最上部では、弥生時代後期の壺形土器が出土している。これらのことより溝の構築年代については、縄文時代晩期~弥生時代後期の時期に相当する可能性があるが、現地では詳細は不明であり、今後発掘調査成果を加えて検討する必要がある。

(2) 周辺植生

第3地点で検出された花粉化石・材・種子は、溝など埋積物から得られたものである。したがって、これらの化石は、異なった場所から運搬・堆積したものが含まれていると推定される。この点に注意しながら、古植生について検討を行う。

SX04が構築された頃には、周辺地域にはガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・カナムグラなどのクワ科・タデ科・アカザ科・ナス科・メナモミ属などが生育していたと推定される。これらの種類の中でガマ属は、水湿地性の植物であることより、周辺に湿った場所が存在していたと判断できる。また、微高地などで比較的開けた場所には、ブドウ属やニワトコなどの木本類も生育していたと推定される。その後SD01が構築され、周辺には基本的には、イネ科・カヤツリグサ科・カナムグラ・タデ科・アカザ科・キイチゴ属・シソ科・ナス科・メナモミ属などが生育していたと判断される。ただし、この頃になると、周辺にはガマ属が生育しなくなったと推定される。

一方、木本花粉ではスギとアカガシ亜属が多産する。この内、アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成種である。このような花粉化石群集は、川台遺跡の他の調査区でも得られている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 未公表)。以上のことより、縄文時代後・晩期~弥生時代後期の頃の周辺の丘陵上には、主にスギとアカガシ亜属から構成される暖温帯的な植生が存在していたと推定される。ただし、周辺の遺跡において出土する加工材の大部分がスギである(山内, 1983)こと、スギが流水に沿う場所ならば低地でも生育が可能であることを考えると、スギは低地にも生育していた可能性がある。

少なくともこのスギは、人間が利用しやすい場所に生育していたのではないだろうか。

ところで、SD01-4層ではクリ属-シイノキ属が多産する。クリ属およびシイノキ属は、花粉生産量がスギやアカガシ亜属などと比較すると少ないことが知られている。また、SD01埋積土中から検出された材でもクリが多く認められる。したがって、SD01が構成された頃には、クリ属が溝の周辺に生育していた可能性がある。

4. まとめ

縄文時代後・晩期以降～古墳時代中期の頃には、本調査区の周辺は湿地～沼沢地のような水域環境であったが、しばしば離水する時期も存在したと推定される。特に弥生時代中期～古墳時代初頭前後の頃には、完全に離水し、常に乾燥した状態であったと推定される。これは、古墳時代中期に本調査区が微高地であったという発掘調査所見と調和的な結果と言える。この微高地には、MVA層が堆積した後にSX04およびSD01が構築される。

SX04にはかつて内部に水が流れており、その後埋積が進むにつれて水深が浅くなるために水の流れが滞るが、再び水位が上昇する水域環境にあったと推定される。このことより、SX04はかつて溝として利用されていた可能性がある。また、周辺には、イネ科・カヤツリグサ科・カナムグラ・タデ科・アカザ科・ナス科などが生育していたと判断できる。

SX04が埋積が終了すると、溝(SD01)が構築される。この溝は、形成された頃に富栄養の水が流れていた。このころになると周辺ではガマ属が生育しなくなり、その後溝の内部は溝内は徐々に乾いていき、埋積が完了する。

一方、縄文時代後・晩期～弥生時代後期にかけて、周辺はスギとアカガシ亜属から構成される植生が存在していたと判断される。そして微高地上には、ブドウ属やニワトコなどの木本類も生育していたと判断される。また、SD01が構築された頃には、クリが周辺に生育していた可能性がある。本遺跡に隣接する瀬名遺跡ではクリの立木が検出されており、弥生時代中期～奈良時代の頃に低地にクリが生育していたことが明かとなっている。これを考慮すると、弥生時代中期～奈良時代の頃、周辺の微高地上などには、クリが生育していたと考えられる。

<古環境研究所報告(抄)>

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般に稲のプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、静岡平野周辺の遺跡では、これまでの調査の結果、プラントオパール密度が3,000個/g程度の場合でも水田遺跡が検出されていることから、判断の基準となる数値を約3,000個/gとした。以上の判断基準にもとずいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

第1地点ではIX層について分析を行った。その結果、いずれの試料からもイネのプラント・オパールは検出されなかった。

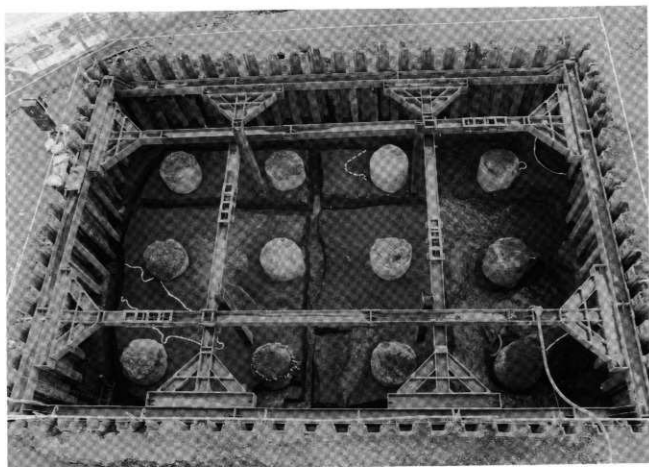
第2地点では、標準土層のXa層～Xb層について分析を行った。その結果、Xa層～XIa層およびXIa層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Xb層、Xc層、XIa層では密度が3,200～5,100個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

ただし、隣接する8区および10区の発掘調査では、これらの層準からは水田跡ではなく集落跡が検出されている。(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1986) ことから、なんらかの理由でこの場所に稲葉が集められていた可能性も考えられる。Xa層およびXIa層では密度が1,000個/g未満と微量であるこ

とから、上層もしくは他所からの混入の可能性が考えられる。

第3地点ではSD01とSX04の堆積物について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが検出された。このうち、SD01の堆積物では、プラント・オパール密度が900~1,600個/gと比較的低い値である。土層の堆積状況から判断して、ここで稲作が行われていたことは考えにくいことから、おそらくこれらの土層の堆積当時にはこの近傍で稲作が行われており、そこから水路内にプラント・オパールが混入したものと考えられる。SX04内の堆積物についても、これと同様に近傍で行われていた水田稲作に伴うプラント・オパールが混入した可能性が考えられる。なお、SX04-3層と5層では、密度が4,900個/gおよび3,800個/gと比較的高い値である。前述のように、ここで稲作が行われていたことは考えにくいことから、なんらかの理由でここに稲葉が集められていたか、あるいは洪水などによって水田土層そのものが運ばれてきたことなどが考えられる。

以上のように、本調査区では古墳時代中期とされるXb層、Xc層、および弥生時代中期~古墳時代初頭とされるXia層で稲作跡の可能性が認められた。また、No.1地点の溝状遺構が埋設された時期には、その近傍で稲作が行われていたものと推定された。



調査区全景



調査前状況



重機によるヘド口除去状況



調査区内調査風景



排土内遺物調査風景



SD01検出状況



SD01・SX04土層断面



SD01土層断面



SD01遺物出土状況



SD01遺物出土状況



SD01遺物出土状況



SD01遺物出土状況



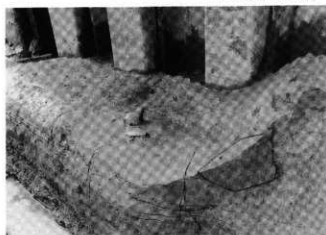
SD01完掘状況



SP06礎板出土状況



SP04礎板出土状況



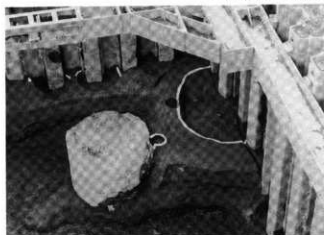
SX02遺物出土状況



SX03遺物出土状況



SP01・02完掘状況



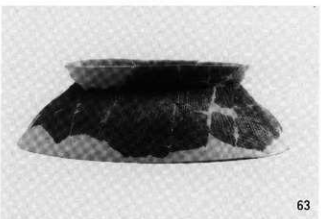
南西側遺構完掘状況

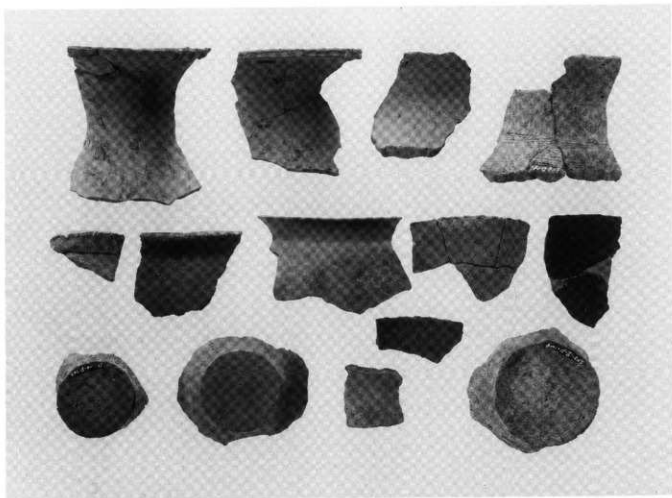


遺物出土状況

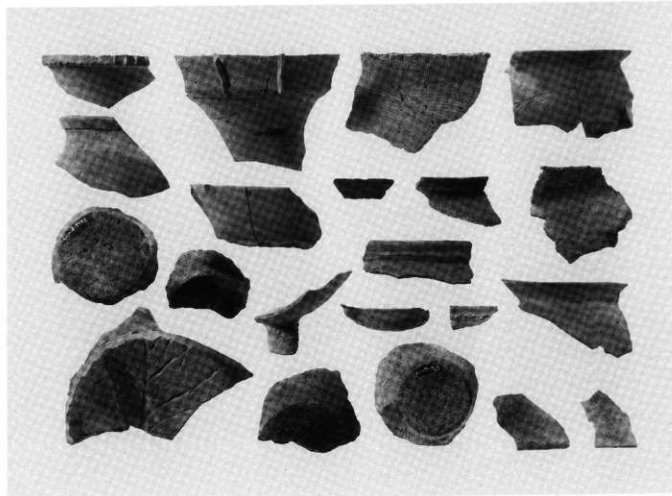


南壁土層断面

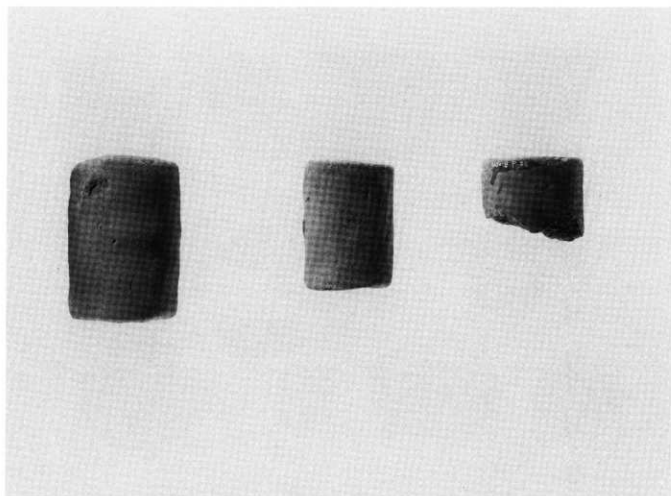




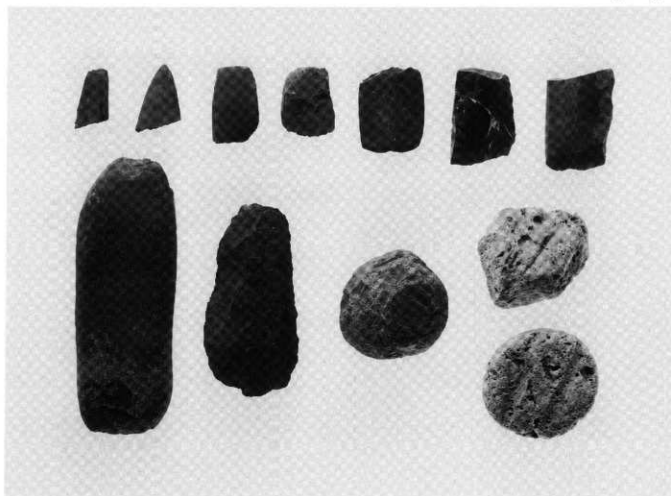
遺構出土土器



包含層排土出土土器



土 錘



石 器

川合遺跡18区

平成3年度静岡バイパス(川合地区)
埋蔵文化発掘調査報告書

1992年3月30日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031